梅宮開係俳書集

島居清
櫻井武次郎 編

古典文庫

梅宮開係俳書集

島居清
櫻井武次郎 編

古典文庫

古典文庫第五〇二冊

昭和六十三年八月二十日印刷発行　非売品

梅室関係俳書集

編者　櫻井武次郎　島居清

発行者　吉田幸一

印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二　古典文庫
電話（九一〇）二一七一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1988. Printed in Japan

目次

叙……三
凡例……五
さるのめん　寛政十三年……七
己巳　四時行　文化六年……二九
四時行　文化十五年……九三
今四歌仙　天保二年……一三九
己之中集　天保五年……一五七
行〻子　天保七年……二五一
追福集　初篇　天保十年……二七三

喜春楽　弘化五年……三三七
かれぎく集　嘉永六年……三九九
梅室翁紀年録　嘉永七年……四六九
解　題……四九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

叙

〝天保の三大家〟とは誰が称しはじめたのか審かにしないし、それが果たして当を得た人選か否かも今は考慮の外に置くが、しかし、江戸の鳳朗、京の蒼虬と並んで梅室が、化政天保俳壇の雄であったことは間違いない。この時代の俳風を「月並調」と言って貶しめた子規の批評は、俳句革新を急ぐあまりか、そして外来文化摂取に急であった明治の一時期の反映か、ともあれいささか我身の都合によってなされた節がある。子規の末徒に至っては、子規の発言の意図も十分に理解されず、ただ天保俳壇＝月並調＝一顧だに値いせざるものという図式のみが伝えられたかの観がある。俳諧研究が俳句実作者によって始められ、そして俳句実作者の多くが子規の流れを汲む者で占められていた以上、化政天保期俳壇の研究が殆ど顧みられることのなかったのはやむをえなかったかも知れない。しかし、俳諧史研究が俳句実作者の手から離れて半世紀を経た今になってなお子規流俳諧史の埒内にあってよいわけはなく、そして、仮に化政天保期の俳諧がつまらぬも

のであるにしても、俳諧史研究とそのことは、おのずと別のものであって然るべきなのである。

化政天保期俳壇の研究を阻む第二の理由に、翻刻の少ないことが挙げられよう。珍本・奇本ならともかくも、ありふれた江戸後期の俳書など憚られるという風潮があるが、しかし、ありふれたものと言っても、十部を超える伝本は、まずない。それどころか、コレクターの対象とならなかったためか、この期の俳書は、公私の図書館には意外と少なく、ために、調査に困難を感じるということは、この期の俳壇や俳人について調べた経験のある人なら、等しく抱いた懐いであろう。翻刻するに値するか否かについて、資料的価値と古書価に反映する骨董的価値とが、不知不識の内に混同されてしまっている嫌いもまたなきにしもあらずである。

――と、弁解がましく述べながら、梅室関係俳書を翻刻する。

凡　例

本書には、梅室の賀集・追悼集を中心に、江戸滞在中の俳風を代表させて『今四歌仙』、北陸帰郷中の俳風を代表させて『己之中集』と『行々子』を収めた。

一、翻刻にあたって、濁点・句読点を私に付した。原本に濁点のあるものは（ママ）とした。

一、漢字は、強いて正字体または新字体への統一をはからなかった。

一、丁移りは「と」で示した。

一、特に記すもの以外は、丁付は板心にある。

一、解題は末尾にまとめた。

一、特に記すもの以外は、桜井武次郎蔵本を底本とした。

翻刻を許可された高岡市立中央図書館と永井一彰氏に深謝申しあげる。

昭和六十三年六月十五日

島居　清
櫻井武次郎

（寛政十三年）

さるのめん

（題簽）

書誌

一、桝型本一冊。16・8×14・0（糎）。砥粉色卍つなぎ格子、行成風表紙。

一、題簽中央。無辺。黄色地。12・05×3・05（糎）。ただし、上から墨でなぞってある。

一、丁付。序文一丁はなし。一（―十二）。最終丁（墨付半丁）はなし。計十四丁。

一、無刊記。

※　梅室処女撰集。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

日の始あれば、月のはじめあり。年の始こそ春なめれと、花鳥のことだま何くれの吟を集て猿の面といふもの、槐庵のぬしが出かされたり。こは、見ざるきかざるとのむつかしきにもあらず、年〻歳〻花の相似て、歳〻年〻もの好のかはりゆく中にも」不易の不易たるは蕉門の正風たるをいさゝか意となして、此かしらに名づけたるを陰静軒珠三かいつくものなり。『

歳　旦　　黙　斎

鶏の聲雲に入る今朝の春
　山の小松を蓬萊に引　　竹　貫
万歳を中橋殿へまゐらせて　　雪　雄

人　日

松風をしづめて出たりわかな摘　竹つら

けさ一とほりぬるゝ沫雪　雪　雄

正月は馬にも青き衣きせて　黙　斎」（一オ）

歳　暮

藁一把まことの直なり年の市　ゆきを

紙衣ふるふて煤掃もすむ　黙　斎

藪に飛ぶ雀が寝覚おこすらん　竹　貫

松がえの軽き方より春の風　茂　秋

鶯啼て障子あかるき　河上雪雄『（一ウ）

おろかなる蚕屋の猫も妻もちて

花に鐘人来ぬうちと撞にけり　ノト赤斧

おぼろ月野は土嗅きあらし哉　〃几山

木の実鳥啼や草なき春の山　クロシマ玻井

古としの塵はらひけり硯箱　〃素玉

朝の間は海の聲なり春の雪　川田乃至

春の雪人まつ軒や今暫し　宇出津碩茂

桐の実のあればあるもの朧月　今石動加玉

梅が〃にけふ踏そむる畳かな　魚津大翼『（二オ）

あそぶとも見えて草摘む姿哉　〃　桃屋

春の雪けふ消るほど降にけり　トヤマ蓬山

鳥の巣の月に落たる朧かな　中川朴軒

白魚や味あるうちは水浅黄　元吉御風

眼のおよぶ處に深し雉子の聲　〃　芝洗

はつ雲雀風の日を出て高音哉　〃少年帰一

海づらもひとつになりし春の雨　〃　きそう

陽炎の何にとりつく野ずゑ哉　〃　聞濤『(二ウ)

うぐひすに雪の夕べを忘れけり　〃　把翠

湖際や物わすれにし春の風　〃　都園

夜るとても都は花の雲井かな　松任甫水

嵐きく三かさ山なり春の月　〻東郊

人まつや夜の柳に釣灯　高松自明

花よりはかさなりやすき柳哉　〻可子

はつ旅や志賀の桜も咲おくれ　宮ノコシ一選

雉子啼や野末の雲のゆり動く　〻故園」（三オ）

ゆく人に隔てはなきぞ春の風　〻堕山

ちかく来て桃のかくるゝ小家哉　〻花白

薄月や柳を覗く夫婦住　寺井宜石

うぐひすを待朝起歟竹の庵　ヱチゴ几丈

瀬がしらに月見ゆる迚雲雀かな　北雁

閑さや寺に過たる窓のうめ　阜石

柳より桜にうつるこゝろかな　蛙井

春風やものにさはらぬ水の音　六羽『（三ウ）

梅がゝや雪の解るに風のなき　志石

うつむいて通る柳のみどり哉　可律

黄鳥のよきほど啼てゆくへ哉　魚舩

波こゆる其色床しふぢの花　流蛍

春の日やおもふほどなる須广明石　一線

尽しなう幾わか松の色深し　文川

古葉たつ気色となりぬ鳳巾　五卜

耕や小草に翌日の日和風　鵤交」（四オ）

梅の雲柳に来ては降にけり　麦斎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl